
生煮えの鮎

野鶴善明

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

生煮えの鮎

【Nコード】

N9691P

【作者名】

野鶴善明

【あらすじ】

世の中の人すべてが信じられなくなり、自分すらも信じられなくなった私。擦り切れた心を抱え息苦しい日々が続いていたそんなある日、京の外れの山奥でひとりの隠者に出会った。

草庵

心が擦り切れる。きりきりと擦り切れる。うわべばかり繕っているからこうなるのだ。とはいえ、この気持ちは誰にも言えない。妻や親しい友人なら、なおさら話すことなどできない。

自分の気持ちを正直に言ってしまうえば、相手の心に負担をかけてしまう。まず、それが怖い。誰だって自分の心をかき乱されたくないものなのだから、優しくいたわってくれる人にそんな迷惑をかけられない。

それに、自分の正直な気持ちが間違っていたらどうしようと思っ
てしまう。裸の心を見られた、と思っただけでもうだめだ。居たたまれなくなつて、自分の足場が崩れ落ちたような気にさせられる。
わかつてくれないなと変に先読みして、わかつてくれるはずがない
と思いこんで落ちこんで、やはりわかつてくれないかったことに落胆
して。的外れだけどやさしくて、あたたかいけど通り一遍な慰
めの言葉がよけいにつらい。理解してもらえないことが、なぜか相
手にすまない。

一人ひとり違う人間なのだから、わかつてもらえないのは、当然
だ。それは重々承知のうえだが、薄々気づいている壁をはつきり認
識すれば、さびしくなってしまう。もつとも、理解してもらえたと
ころでどうにもならないことも、わかつている。結局のところ、こ
の擦り切れた心は自分ひとりで背負わなければならないものなの
から。

馬に跨りながら溪間の小道をとぼとぼと進んだ。

いつも同じことを考えては堂々巡りだった。その先を考えたいの
に、どうすればいいのかわからない。同じことの繰り返しから抜け
出して、どこかへ向かって進みたいのに、出口が見つかからない。私
という迷路にはまりこんで、方角を見失ってしまったようだ。空っ
わたくし

ぼの心しんに匏ひょうをかけては、肉も血も削いでゆく。いつも、胸が、圧されたように痛む。

馬に鞭を当てて急いで帰らなければいけないのはわかっている。とはいっても、とてもそんな気にはなれなかった。なにも知らないうで優しく迎えてくれる妻。早く孫ができないかとそればかり気にしている両親。友人からの連歌や食事の誘い。そのどれもがやりきれない。このままずっと独りきりであるほうがどれだけ気が休まるだろう。いつそのこと、路傍の石になって、なにも感じずに、なにも考えずにいられたらどんなにいいことか。どうせ出口がないのなら、誰にも煩わづわされず、誰も煩わづわさず、うずくまっていたい。

日が暮れなすむ。

ぼんやりとした夕陽が深い山の谷間に懸かり、木立を吹き抜ける肌寒い風があたりを夕闇色に染める。雪解け水のほとばしる瀬の音がにわか大きく響いた。ふと、自分の不安が音を立てて碎けるように感じた。

私はもうじき二十四歳になる。京の都の外れでは追？がはびこり、行き場のない貧民が都の大通りで行き倒れになる乱れた世にあつて、屋敷の塀へいのなかでこれといった不自由もなく育ち、今は宮仕えをしている。自分ではそれなりに努力して勤めに励んでいるつもりだが、友人たちは、私は宮仕えに向かないと言う。確かにそうかもしれない。とはいえ、ほかにできそうなこともない。友には一流の歌人になった者や、高貴な女性を次から次へと口説き落として浮き名を流す者もいるが、私にはこれといった才能も魅力もない。私には平凡な日々がよく似合う。どこにでもいそうな、おっとりとしていて皮膚の薄い青年。それが私なのだから。今日は役所の仕事で都から山を越えた小さな町へ使いに出かけ、今はその帰り道だった。川の水際まで降り、尻尾を振りながら大人しく水を飲む馬の首をなでた。時々、私はほんとうの想いをこの馬だけに打ち明けた。彼だけは、私を欺いたり、軽蔑しようとしないう。ただ黙って話を聞いてくれるのは、ほかに誰もいなかった。

再び馬に乗り、細い道をゆっくり進む。頭のなかは、またさっきの出口のない考えに戻る。

「これが明日も続くのか」

ため息をついてふと頭をもたげると、川沿いの段丘にぽつりと建った草庵の前を歩き過ぎようとしていた。質素で小さな造りの庵だが、庭はきれいに掃き清められていて、薄暗いなかにも凜としたすがすがしさがある。水車が静かに回っている。背の高い孟宗竹が風になびき、丸い障子の窓にろうそくの明かりが揺れていた。なんとなく心惹かれ、轡くわを引いて馬を返した。

「お願い申します」

私は馬を降りて呼ばわった。

障子に人影が映る。

すつと障子が開き、黒い袈裟に身を包んだ在家の袈弥しゃみが顔を覗かせた。袈弥とは剃髪して出家したものの特定の寺にも宗派にも属さず世捨て人として過ごしている者のことだ。私は、時が遅くなってしまうので誠に相申し訳ないが一夜の宿を乞いたいと願い出た。「それはさぞお困りでしょう。こんなところでよければお泊りください」

日頃の読経で鍛えているからだろう、袈弥の声は朗々と響いた。ただ響きが美しいばかりでなく、なにか大切なものへ向かってひたむきに歩いてゆくような、芯の通った確かな声だった。

羨ましい。

あこがれとあきらめに似た心持が心の底にふつと湧き、それがないまぜになる。上辺だけの人間関係をとり繕いながら生きている私とは違い、彼は人として大事なものを守り、本物の生き方をしてるように感じられた。

袈弥はふたつ手を叩いて下男を呼び、客人をもてなすよう言いつける。

「恐れ入ります」

私が頭をさげると、

「玄関へお回りください。すこしばかり用事を片付けなければなりませんので、後ほど」

と、袈弥は言って障子を閉めた。

下男の小僧が玄関先で出迎えてくれた。まだ裸のまま寒そうな紅葉の木に馬を繋ぎ、馬の背から外した荷をとりあえず玄関に置く。庵へ上がってすぐ、風呂をよばれた。乾いた風に一日中さらされていた私は埃まみれだった。

一人入るのがやっとの柵形の湯船に半畳ほどの洗い場があるだけの狭い風呂だが、湯船は新しく清潔だった。檜のあざやかな木目が美しい。木立の香りがほのかな湯気にまじり、ふんわり漂う。

湯をすくおうとして、手にした桶をふととめた。

鮎が一匹泳いでいる。

小さな鮎だった。湯疲れしてしまったのだろうか。水面に突き出した口をせわしなくぱくつかせている。息が苦し気だ。きつと、小僧が横着して井戸の水を汲まずに川の水を直接湯船へ引き入れたために、心ならずもまぎれこんでしまったのに違いない。

「驚かせてすまないね」

そつと湯をすくい、かけ湯をした。湯はいささか熱めだった。

私が湯船に浸かってても、鮎は逃げもせず、やはり水面にしがみつくようにして漂っている。

焚き木が燃えて湯が温もり出した時、この鮎はさぞ腰を抜かしたことだろう。そう思うとなんともいえないおかしみがこみあげてきたが、そんな愉快的気持ちも泡のようにすぐに消えうせた。

両手で鮎をすくった。

鮎はおびえ、あらぬほうを見て弱々しく尾を打つ。

活きのよい鮎なら身をよじって逃げ出そうとするのだろうか、ぐったりしていた。どうにでもしてくれと運命のなされるままに気だるく身を横たえている。

「私に似ているね」

じつと鮎を見つめ、つぶやいた。その声が狭い風呂場でかすかに

こだまして、私の心を苦くした。

生煮えの地獄とでも呼べはよいのだろうか。煮えたぎる湯でいっそ息絶えてしまうこともなく、どちらへ向かって泳ごうにも厚い壁に阻まれて進むこともかなわず、狭い湯船のなかで氣力を失っている鮎の姿が今の私自身と重なった。心がおぼつかない。

「そのうち湯も冷めるだろうから、もう少し我慢しておくれ」

私は微笑みかけ、湯へ戻した。活かしもせず殺しもしない湯船のほうはまだよいのか、鮎は待ちかねたように湯船の奥深くへと急いで潜りこむ。風呂の湯はすぐにでも冷める。だが、この胸に抱えこんだ生煮えの地獄はいつまでも終わりそうになかった。

隠者

一汁一菜と雑穀飯の夕食を馳走になり、炉を挟んで袈弥と向かい合った。

春の宵はまだ寒い。時折、どこからともなくすきま風が忍びこむ。私は炉の焚き火に手をかざした。

世間には、在家の袈弥のことをまむしと呼び、だかつ蛇蝎の如く嫌う人もいた。世を捨てて仏と暮らすとは言いながら、世を遁のがれればなにをしても自由だとばかりに傍若無人に振舞う手合いが多いからだ。銭で購あがなった遊女を山里の庵に住まわせ、女遊びに耽る者も少なくなかった。

彼は違った。

彫りの深い顔立ちは鋭く引き締まり、今こうして向かい合っている時も厳しく自己を刻み続けている様子が見て取れる。妥協も弁解も許さないなにかが彼のなかにみなぎっていた。眉間にすつと縦に二本並んだ深い溝も、鋭くそりたった耳も、黒々とした太い眉も、すべてが峻厳だ。彼と向かい合うだけで、心が引き締まるようだった。

孤高。

この二文字が脳裏に浮かんだ。宮廷で高位まで昇ったひとかどの人物かもしれないと思いつながら名を尋ねたが、

「よいではありませんか」

と、穏やかに首を振るだけで答えない。世捨て人の名を聞いてもはじまらないでしょうとでも言いたげに。再び世間へ引きずりこまれるのを拒むように。

「静かですよとこです」

私は部屋を見渡した。なにも飾らない囲炉裏の間だった。板壁は煤けて黒ずんではいるものの、みすばらしくは見えない。ただひそ

やかな祈りと瞑想だけが壁にしみこんでいる。焚き火が軽やかに爆ぜ、乾いた音を立てた。

「なにもないところですから」

袈弥は何気なく答える。

「ここへこられてどれくらいになるのでしょうか」

「かれこれ十年ほどになりますかな」

「素晴らしい暮らしですね。最高の贅沢のように思えます」

私はここでの暮らしを想像してみた。人里離れたこんな山奥でなら、人生の憂鬱から解放され、生きいきと生きられるかもしれない。周りの目ばかり気にして自分の気持ちや心に思った疑問を押し殺し、周囲から浮き上がってしまったわなようにたえず神経をすり減らすこともないだろう。人に怯えながら過ごし、消え入りたい気持ちになることもないだろう。

「みな、そのように言います。私も初めはそう思い世を遁れました。ですが、家族の反対を押し切って遁世してみたものの、ここへ移り住んだ当初はなかなか大変でした。とんでもない所へきてしまったと悔やみ、いつそ京の町へ戻ろうかと悩んで毎晩眠れないほどです。なぜだかおわかりですか？」

袈弥はそう問いかけ、白湯を一口すすった。

「山の生活に慣れないからでしょうか」

私は首を傾げた。

「それもあります」

「やはり、人恋しくなるからでしょうか」

「それもあります」

「ほかには思いつきませんが」

「一言で言えば、己が怖くなるのです」

袈弥は湯のみを置き、じっと私の目を見つめた。どこまでも澄んだ、だが力のこもったまなざしだった。

「この暮らしにも慣れ、人恋しさも断ち切り、ほかの在家の袈弥との付き合いも遠慮してやっと独りきりになれたと思ったら、ちょ

うど澄んだ池の底にたまつた枯葉や倒木や泥が見えるように、己の心にたまつた恐ろしい欲望や邪念や、過去に犯した罪業の数々が見えすぎるほど見えるようになるのです。そんなどろどろとしたどす黒い心や己の犯した過ちは正視するに耐えません。

若い頃、私は部下のささいな失敗にひどく怒り、これでもかとはかりにすさまじい剣幕でなじつたことがありました。

軽く注意すればそれで済むことでしたが、ちょうどその時、虫の居所が悪かったこともあつて八つ当たりをしてしまったのです。宮仕えで窮屈な思いをしていた鬱憤が堰を切つたように溢れ出てしまい、そのすべてを彼にぶつけてしまいました。

ずいぶん昔のことなので、私自身、そんなことはすっかり忘れていたのですが、ここで読経と座禅の毎日を送っているうちに、突然、池の底から浮かび上がるようにしてそのようなことが思い出されたのです。あの時、彼は今にも首を吊つてしまいそうなほど悲しい顔をしていました。彼には遠くおよばない高い身分である私に口答えするわけにもいかず、ただ顔を蒼ざめさせ、身の置き所もないように唇をわななかせていました。内心、憤りと不安で心が引き裂かれそうだったことでしょう。実際、彼は体調を崩してしばらく仕事を休む羽目に陥つてしまいました。そんな彼の顔が日毎夜毎に浮かんでは、私の心を苦しめました。いえ、こんな言い方は傲慢ですね。もちろん、私の咎とがです。私自身が作つた過ちです。自分の過ちで自分が苦しむのは当然のことでしょう。そのことばかりではありません。あれもこれもとさまざまことが思い出されては、良心の呵責に苦しみました。私の心は白洲へ引き出されたようでした。

そうかと思えば反対に、昔受けた小さな恥辱を思い出し、憤怒の塊と化してしまうこともありました。恥辱といつてもたいしたことではありません。たわいもないからかいの言葉やつまらない人が言つた心ない一言に過ぎません。ですが、それが大きな蛇のようになつて心をたうちまわるのです。心のなかで暴れているのです。一番やりきれないのは己です。そんな自分がやりきれなくなりす。

世を捨てれば、心が浮かび上がります。なにものにもかえがたい大切な己の心がです。しかし、その心がいかに汚れているか、世俗の暮らしのなかで省みることはありません。まれにそうすることがあったとしても、雑事にまぎれてすぐに忘れてしまいます。汚れた自分を突きつけられて、私は参ってしまったのですよ」

袈弥はやはり、わかりますかと問いかけるように私を見つめる。

「そうなのです。私はてつきり、このようなところで仏三昧の暮らしをすればなにもかもが」

私は落胆してしまっただ。

「解決すると思っていましたか？」

「はい」

「問題から逃げることはできません。気儘きままに暮らそうと思えば、できないことはありません。現に多くの在家の袈弥がそうしています。

ほどほどにお勤めをして、ほどほどに参禅して、あとはのんびり時間を楽しむ。そんな隠居暮らしです。私はそれを責めようとも非難しようとも思いません。彼らは彼らで息苦しい俗世を遁れ、ほっと一息ついている訳ですからそれも一つの生き方でしょう。ですが、ほんとうに仏の道を行じたいと思えば、この世の苦しみから遁れたいと思えば、つらいことを乗り越えなくてはなりません」

「どうやってそれを乗り越えられたのですか」

「私は乗り越えてなどいません。まだ迷いのなかにいます」

「そうおっしゃられますが、ずいぶん落ち着いておられるようにお見受けいたします」

「そう見えるだけです。心の中では今でも苦しみが渦を巻いています」

袈弥は頭を振った。

「ただ、ここへ移り住んだ当初に比べればずいぶん楽にはなりませんでした」

「そこをお伺いしたいのです。どうやって楽になられたのでしょうか」

「ひたすら、己の心を正視し、仏を見つめました」

「それだけですか？」

「ええ、それだけです。しかしさつきも申し上げたとおり、外から見れば簡単なように見えて、その実、なかなか容易なことではないのです。よほどの決心と我慢強さがなければ、できることではありません」

「簡単にはゆかないのですね」

私は膝元に目を落とし、ため息をこらえた。悲しい風が心を吹き抜ける。我知らず目の潤んでしまうのが自分でもわかった。

「どうかしましたか」

「いえ、なんでもありません」

「この侘び住まいの庵には、時折誰にも言えない悩みを抱えた方がこられ、言うに言えない悩みを打ち明けていかれます。私は慣れておりますから、もしよければどうぞご遠慮なくおっしゃってください。ここで聞いたことは誰にも話しません」

袈弥の声はただひたすら穏やかだった。

私は膝に乗せた拳をぎゅっと握り締め、なにも答えなかった。答えられなかった。今出会ったばかりの袈弥にあのような話をすれば迷惑だろうと逡巡し、やはり知られたくないという思いが覆いかぶさる。心は冷たい霧につつまれたみたいだ。暗くて、じめじめする。その一方で、なにをためらっているのだと心のなかで叫ぶ自分もいた。

もう一人の私は、たとえ恥ずかしい思いをしたとしても話してしまおうと私に向かって呼びかける。彼なら、冷笑を浮かべたり嘲ったりして自分を傷つけない。突飛な話に思えても、それなりに受け止めてくれる方に違いない。さっさと話してしまえよと。

私はそつと目を閉じた。

魔虫

隙間風が吹きこむ。

焚き火が揺れる。

私は伏せた顔をあげ、裳弥を見つめた。裳弥の顔は微笑んでいるようにも見えた。話すのなら、今しかない。彼しかない。

「私は自分の気が狂ってしまったのではないかと思い、空恐ろしくてならないのです」

私はそつと裳弥の顔色を窺った。裳弥は黙って頷き、話を続けるようにと目で促す。

「初めは錯覚だと思いました。役所の机で書類を書いておりますと、ふとした拍子に、隣に坐っている同僚の顔に蛆虫のようなものが蠢いているのが見えたのです。私は上げそうになった声を飲みこみ、それからすぐに思い直しました。死人や重病人でもあるまいし、生きている人間の顔に蛆の湧くはずがありません。仕事がたてこみ、おまけに例年にない厳しい暑さの続いていた頃でしたから、疲れて目がかすんだかなにかでそう見えただけに違いはない。そう思っただけで、目を閉じてから、同僚に気づかれぬよう彼の？を盗み見しました。思ったとおり、蛆虫の姿は見当たりません。私はほつと胸をなでおろしました。

ですが、あくる日、役所の机で筆を走らせていると、また彼の？に蛆虫が見えるではありませんか。今度は思わずつりこまれて、まじまじと見つめてしまいました。よくよく見てみれば、それは蛆虫などではなく、茶色がかった細長い毛虫でした。ほんの小さな虫で、小指の先ほどの長さくらいでしょうか。つんつんとした細かい毛が体一面に生えていました。

人の肉を喰らう恐ろしい毛虫です。？のあたりにびっしりとひしめき合い、？の肉を食い破っていました。それなのに、同僚は痛そ

うな素振りさえ見せません。私の視線に気づいた同僚が怪訝そうな顔をしたので、私はとっさにごみがついていると合図しました。彼は？を払って照れくさそうにします。毛虫はばらばらと床へ落ちたのですが、彼は平気なままでした。払った手に毛虫が何匹か残っています。それが、それにも気づきません。彼の？の肉は赤くむき出しになり、柘榴ざくろの実のようでした。

私は井戸へ行き、冷たい水で顔を洗いました。ざつと顔を拭い、目にじかに水をかけて洗い流しました。毛虫の残像が目には焼きつき離れてくれません。あんな毛虫が？に巢食えば誰だつてわかります。でも、同僚は一向に気づいていませんでした。そうです。私の気が狂ったのです。だからあのようなのが見えたのでしょうか。なんの罰だかは知りませんが、とうとう私の気が狂ってしまったのです。

いつか狂ってしまったのではないかと前からそんな予感がしていました。人前でこそなんでもないかのように振舞っていました。いつも胸に圧迫感があつて、すつと気分が晴れることがあります。人の言った何気ない言葉を妙に勘繰つては、ああでもない、こうでもないと思ひ悩み、考えれば考えるほど袋小路に入ってしまうように、人の言葉や態度を必要以上に気に病んでしまうのです。こんなことを続けていればそのうち狂ってしまうだろう。そう思っておりました。

私の症状は急速に悪化しました。

ほかの同僚の顔にもあれが見え、上司の顔にも見え、友人、北面の武士、町の商人、道行く僧侶の顔にもと、誰の顔にも例の毛虫の姿を見つけ出しました。あの姿だけは、何度見ても慣れません。見るたびにぞつとして、心がさつと焼け焦げるようです。心臓がきゅつと締まって血液が逆流し、自分の？もひりつくように焼けてしまうのです。私は、いつも鬱陶しい顔をしていると人に言われるようになりまし。あれが見える度に、苦い気持ちを感じられないからでしょう。次第に、人と話をするのが億劫になり、相手の顔に毛虫が見えればそそくさと話を切り上げてその人から離れるようになり

ました。

こんなことは誰に言えません。気が狂ってしまったなどと人に知られたら、宮仕えができなくなってしまう。近頃の人々はやたらめったに自分の直感ばかりを信じて迷信深いですから、私自身も家内の者も、穢れ者のように扱われてひどい目にあわされてしまいます。世間からつまはじきです。家族に内緒でこっそり薬師を訪ねてみましたが、よくなりません。寺籠もりをして心を清めようと試みましたが、効き目はありません。どうしたものかと途方に暮れるばかりです。

そんなある日のことです。私が一番初めに例の毛虫の姿を見つけた隣の机の同僚が、ほかの同僚とくだらないことで諍いを始めました。喧嘩の原因は、塩という字をどう書くか、『塩』と書くのか、それとも『鹽』と書くのが正しいのかということでした。通じればそれでいい話なので、どちらで書いてもかまわないのですが、お互いに自分のほうが正しいと言い張って譲りません。小姑根性とでも呼べばいいのでしょうか。いったい、今の世の人は、どうでもいいことで相手に難癖をつけては相手より自分が優位に立とうとしているように見えてなりません。無意味な競争をして、それで勝ったと悦に入るのが人間なのでしょうか。無意味な競争で負けたからといって、相手を憎むのが人間の性なのでしょうか。もつとも、この諍いには伏線がありました。これも次元の低い話なのですが、二人は白拍子の女を取り合ってお互いを敵視していたのです。そんなことで相手を許せなくなるのですから、人間とは次元の低い動物なのかもしれません。もちろん、私を含めての話です。

罵り合う二人の顔が真っ赤になった、と思ったとたん、例の毛虫がさつと顔一面に広がりました。汗が流れ落ちるように、二人の頭から毛虫がぼたぼたと垂れ落ちます。二人の顔は蛆に食い尽くされた屍のようでした。見ていられません。髪も、耳も、額も、顎も、すべてを覆いつくした毛虫が彼らの顔の肉を貪り喰っているのです。私は胃の底からこみあげてくるものを覚え、急いで廁へ走りましました。

具合がおかしくなつて仕事どころではなくなつてしまつた私は早退して家へ歸つたのですが、これだけでは終わつてくれませんでした。

日が暮れた頃、祖父の残した莊園の処分について相談したいと叔父がやつてきました。相談とは言いながら、叔父はすべて自分が取つてしまふ腹積もりで、私の父が熊野詣へ出かけている隙を見計らつて私を丸めこみにきたのです。下卑た作り笑顔を浮かべる叔父の顔に例の毛虫が瞬く間に広がります。言葉巧みに取り入ろうとする叔父の話を遮り、さつさと歸つてもらふことにしました。私は叔父とやり合うどころではなく、気分が悪くてしかたありませんでした。叔父は弱り果てた私の顔を見て、にやりと笑います。その瞬間、毛虫が叔父の耳から滝のように次々と零れ落ちました。

叔父に引き取つていただいた後、私は縁側で涼みながら苦しい息を整えようとしました。独りにしておいて欲しかったのですが、妻がそばへやつてきてぺたりと坐りこみます。妻は叔父の話があんまりだと腹に据えかねたようでした。もちろん、私にしろ腹が立っていることには変わりありません。『恒産なくして、恒心なし』と『孟子』に書いてありましたが、どうやらそれは嘘のようです。嘘と言つのが言い過ぎなら、孟子は人の欲深さがあまりわかつていないかつたのではないのでしょうか。恒産があれば、もっと欲しいと思うのが人間の性なのだと思ひます。恒産があれば、よけいに人と張り合うようになり、人よりももっと欲しい、あれも欲しい、これも欲しいと欲を張るのが人間なのではないのでしょうか。人間の欲には切りがありません。恒心は恒産から生じるのではなく、もっとほかの別のものから生まれるものではないのでしょうか。

私は妻の繰言を適当に聞き、適当に相槌を打っていました。これも夫の務めです。ふと気づくと、彼女の？にあれが蠢いていました。鶉卵くらいに広がつた例の毛虫が、何重にも折り重なつて妻の？を貪つているのです。それまでいくらあれを見ても、つまるところ他人の毛虫でした。家の者にだけはあれが見えず、私にとってはそれ

が唯一の救いでした。家だけが安らぎの場でした。ですが、妻でさえ例の毛虫を飼っている。そう思うと、私は居場所のない気持ちにさせられてしまいました。身の置き所がなくて、やりきれません。自分で言うのもおこがましいかもしれませんが、氣立てがよくて普段は欲を張ったりしないつつましい女です。とはいえ、やはり財産の話となると例の虫がうずいてしまうのでしょうか。

その時、ようやく私は気がつきました。

例の毛虫が現れるのは、欲や見栄といった人のどす黒い気持ちが心に広がった時です。思い上がった気持ちで心が膨れると、あれが活動し始めるようです。世間の人はみな、他人も、親しい友人も、親も兄弟も、そして妻でさえも例の毛虫を心に飼っています。私にも、あれが巣食っているのでしょうか。自分の顔だから見えませんが、見る人が見れば、私の？に蠢いているあの虫の姿が見えるのに違いありません。

人がみな嫌らしいものに見えて、誰も信じられなくなりました。心が擦り切れてしまいました。人が穏やかな気持ちでいる時には、あれは現れません。ですが、浅ましい思いや邪な思いが少しでも心に芽生えると、例の毛虫はすぐに蠢きます。あれは子供以外のどんな人の？にでも現れます。例外はありません。すれっからしや業突く張りはもちろんですが、世間の善人として振舞っている人にも、自分は悪いことなどしないと固く信じこんでいる人間にも等しく現れます。私は、いつ毛虫が蠢くのかと怯えながら人と話し、？に見えるあれを見て見ぬ振りをしながらうわべだけをとり繕い、外の人たちとも、家の者たちとも付き合ってきました。ですが、もう限界です。いつそのこと、狂いきってしまったほうがどんなに楽でしょう。自分を処分したほうがよいのではないかとさえ思います。生煮えの地獄を生きているようで、どうにもつらいのです」

私は語り終え、じつとうなだれた。

覚悟

心の臓がじんと痺れる。胸が痛かった。

袈弥は額に皺を刻み、瞑目した。数珠を繰りながらなにをどう話すべきか考えているようだ。重く閉じた瞼に理性がゆらく。

私の話を深刻に受け止めてくれたことは彼の表情からわかった。それだけが救いだった。ほんとうに、今まで誰にも話せないことだった。

沈黙が流れた。

遠くで梟が鳴く。

やがて、袈弥はおもむろに口を開いた。

「私は生まれつき靈感の鈍い者ですからそのようなものを見たことありませんが、世の中には非常に靈感の強い方がおられるのも事実だと思います。そのようなものが見えれば、さぞたまらないことでしょう。ですが、大事なことはあなたが毛虫を見てどう思うのか、そして、どう行動するかなのではないのでしょうか」

袈弥は手元を見つめ、やはり静かに数珠を繰る。

「どう思うと言われるても、私はただ恐ろしくてなりません。役所などというところは、もともと人間関係がぎすぎすしたところですよ。人を疑うところから始め、人の掘った落とし穴にはまらないようにすべてを疑いながら仕事を進め、陰険な足の引つ張り合いに巻き込まれたりしないように、あらぬ噂を立てられて陰口を言い触らされたりしないように気を配らなければいけません。特に親しくもない同僚から笑顔で話しかけられたりすれば、裏でなにを考えているのか、私をどう利用しようとしているのかと勘繰り、鳥肌が立ってしまいます。日々、心が傷みます。見えない天井に押しつぶされそうになっているところへ、他人の本性が毛虫になって見えてしまうのです。それも、唯一安らげる家族の者にまで。もうどうすればよい

のか、わかりません。私は誰も信じることができないのです。自分すら信じられません」

私はやるせなく首を振った。もっと言いたいことがあるような気がするのだが、やりきれない思いが心のなかで渦巻くだけで、言葉が見つからない。

「気持ちはお察しします。他人の本性が見えた時、どす黒い心になつた時、人は誰でも人間嫌いになつてしまいます。私もかつてはそうでした。しかし、嘆いてばかりでも始まりません」

「私もこんな自分が嫌でなりません。今の自分から早く抜け出したいです。とはいえ、いつたいどうすればよいものやら。私はただ平穩に暮らしたいだけです。人間らしい正直な暮らしを送りたいだけです。望みは、ただそれだけなのです」

「人間らしい暮らし、ですか」

袈弥は、なにか言いたげに唇を動かして腕を組む。

「たいそれた望みだとは思いませんが」

難しそうな顔をした袈弥を見て、ひよっとして自分はとんでもないことを口走ってしまったのだろうかと思惑った。自分でもいけないことだとは思うのだが、どうしても他人の顔色をうかがってしまう。それほど、心が消耗していた。

「人間らしいことがいいことであるようにおっしゃっておられるように聞こえますが、その人間らしさこそが怪しいと、あなたは気付いておられるはずですよ」

その言葉にはつとさせられた。袈弥の声はこんこんと湧く岩清水のようだ。ざっくりと割れた心の傷にしみる。

「そうですね。気づいてはいるのです。ただ、認めたくないだけで

「

たとえ認めたくないことであっても、現実を直視しなければなりません。すべては、そこから始まるのですよ」

「あの毛虫は、人間の愚かさだと思えます。どんな虫下しを飲んでも消せないものでしょう。人は愚かで醜いものです。私自身も妙な

自尊心や欲がありますし、悪意を持った相手をはねのけて自分や家族を守らなくてはいけない時には、人の悪いことも敢えて行なわなくてはなりません。私の心にも悪を抱えています。私は愚かで弱い生き物なのです」

私はあれを見るようになってから今まで考えてきたことを述べた。こんなことを人に言えば、不快な気持ちにさせるだけだから、友や妻にも言えなかった。袈弥は小さく頷く。

「世の大多数の人々は、自分の愚かさ、弱さ、醜さを人間の強さだと勘違いして生きています。その毛虫に乗っ取られて生きているのかもしれない。名利が人を動かします。自分が人生の主人公になつたつもりでいて、実は名利に操られていることに気づいていません。名利に操られる自分が世界でいちばん偉いと思いこみたがるのが、人間の愚かさであり、人間の弱さ、醜さです。しかし、あなたは毛虫のおかげでそれに気づくことができました。これは意味のあることだとは思いませんか。ここはひとつ、毛虫が見えたことをいい方向に考えてみればどうでしょう。あの毛虫が見えるようになったのは、仏からの呼びかけのように思えます」

「どういうことでしょうか？」

私は袈弥の言葉を理解しかね、首を傾げた。

「もしあなたがあの毛虫を見なければ、鬱陶しい思いをしながらも人生はこんなものだろうと思つてなにも気づかずただ漫然と生きていたことでしょうか」

「それならそれでよかつたのでしょうか」

私はうつむいた。

「それではいつまでたつても、鬱陶しさや窮屈さは解決しませんよ。たとえ、あの毛虫が見えなかったとしても、苦しみにきちんと向かい合わなければ、どこまでもついてまわるでしょう。逃げてはなりません。苦しみから逃げる時ほど、苦しみが恐ろしく感ぜられる時はありません。苦しみというものは、逃げれば逃げるほど物の怪のように追いかけてくるものなのですから。」

苦しさをこらえ、きちんと向かい合いさえすれば、つらくとも希望が持てます。人はいつも仏に呼びかけられています。仏という呼び方が好きでなければ、『まこと』と呼んでも差し支えないでしょう。苦しみや己の愚かさといったものにきちんと向かい合いなさいという呼びかけです。問題は、それに気づくかどうかなのですよ」「呼びかけは呼びかけでも、私には魔物の呼びかけだとしか思えないのですが……」

「魔物の呼びかけなんぞでは決してありません。盗賊に襲われたりして肉や臓物がむき出しになった死体をご覧になったことがありません。ありでしょう」

「ええ。都の通りでも、加茂川沿いでも見かけます。近頃はなにかと物騒で、どこにでも転がっていますから。むごいものです」

「こう考えてみればいかがでしょうか。肉や内臓は人間が宿しているものです。その毛虫もまた人間が宿しているもの。つまり、本性です。ほんとうの姿が見えただけのことです。人間の本性を直視しなさいと、仏が、まことが呼びかけているのだと思います。そして、それを乗り越えなさいと」

「仮にそうだとしても、私にそんなことができるのかどうか」「つらくても安心なさい。仏に見守られていない人間など、この世には一人もおりません。仏はいつもあなたのそばにいて、慈悲の心で温かく見守っています。そして、いつもやさしく呼びかけてくださっています。人として生まれてきたからには、全力でその呼びかけに応えなくてはなりません。人生には起こらなければよかつたことなど、なに一つありません。意味のないことなど、一つとしてないのですよ。あなたが見た毛虫もそうです。すべてが、仏の呼びかけだと、まことの呼びかけだと、私はそう信じています」

袈弥の声は穏やかさのなかにも確かな熱を帯びている。鞆たもとで吹かした炭火のような温もりだ。その熱が凍てついた私の心を融かしてくれるようだった。

「そんな風に信じなければいけないのでしょうかね」

私はこくりと頷いた。

「あなたが仏やまことに問いかけるものではありません。仏やまことがあなたに問いかけているのです。さきほどお話したように、私は恥ずかしいことにいい歳になってからそれに気づき、人間の本性と向かい合うことにしました」

「そうされて、つまるところ、なにがおわかりになったのでしょうか」

「大いなる悲しみです」

袈弥は鋭い？をひっそりさせる。

「私は常に裏切つてしまいます。仏は欲望を消せ、慈悲で心を満たせとおっしゃいますが、いくら努力しても完全にそうすることはできません。仏の呼びかけを裏切り続けてしまいます。世の人々もまたそうです。輝く慈悲の心を持つているはずなのに、それを裏切つてしまいます。これが大いなる悲しみです。汚辱にまみれたちつぽけな私は、ままならない私のまま、人と人が苦しめ合うこの世で生きるよりほかにありません。人を苦しめるのは人間そのものにはなりません。私は、大いなる悲しみでもって自分自身とこの世界を受け容れることにしたのです」

「やはり、この世は悲しみしかないということでしょうか？」

「もちろん、悲しいことばかりではありません。喜びもあります。ささやかな私の人生にも、有頂天になってしまふのほどの嬉しいことが幾度ありました。とはいうものの、喜びというものは、悲しみという名の海に浮かんだ小舟のようなものです。めったにあることではありません」

「わかるような気がします。今の私には小さな喜びすらもないのですが。それで、その大いなる悲しみを受け容れた後、どうすればよいのでしょうか」

「それはご自分で考えられるべきことでしょう。私ごときがとやかく言うことではありません。生きるのはあなたご自身なのですから」

「あつかましいかもしれませんが、もしよければお話いただけないでしょうか。私は手がかりが欲しいのです」

私は袈弥の目をじっと見つめた。袈弥は黙ってうなずき、「釈尊の教えに従うなら、やはり解脱を目指すべきなのでしょう」と、自分の心のうちを見つめるようにまぶたを半分閉じる。

「解脱は驚きです。驚き以外のなものでもありません。」

世は栄枯盛衰を繰り返します。栄えた者で滅びなかった者はいません。『平家物語』の冒頭の一節はあなたもよくご存知でしょう。世の中が繁栄し、進んだかのように見えても、それは表面上の錯覚に過ぎません。進歩のなかには必ず退化の芽がひそんでいて、その退化の芽が大きくなれば、ひと時の繁栄もやがて過去のものとなってしまいます。春夏秋冬と季節がめぐるように時間は円環し、どこへもたどり着くことができません。去年の春は、今年の春と同じ。来年の春は今年の春と同じ。いつまでたっても同じことを繰り返すだけ。苦しみの種が尽きることはありません。人々は自分を苦しめる愚かさ気づかないまま、懲りもせずに同じ過ちばかりを繰り返してしまつのです。

釈尊は、そのような円環する時間から抜け出せると主張しました。あらゆる苦しみから完全に抜け出すことができる。そして、その考えを実践し、人が生まれながらに備えている悲しいほどの愚かさや弱さを克服できることを現実に証明してみせたのです。これが驚きでなくてなんでしょうか。心に煮えたぎる地獄を超えることができるのです。愚かしくて腹立たしい自分を変えることができるのです。大切なものを裏切り続ける自分から抜け出すことができるのです。もう同じ過ちを繰り返すことなどありません。心は真の意味で光り輝きます」

袈弥は穏やかに微笑んだ。瞳がやさしい野の仏のように光る。

彼の言うことなら、信じていいのかもしれない。ふとそう感じた。仮にそれがたとえ偽りや幻だったとしても騙されたとは思わないだろう。

「少しずつでも悲しみや苦しみと向かい合えたらと思います」

まとまりのつかなかった苦しみ、ほんのすこしだけ輪郭を描けた気がする。それだけでも、今の私には十分にありがたかった。胸の痛みがいくぶん和らいだ。

その後も、二人でしばらく話しこんだ。袈弥は風雅を愛する趣味人でもあった。庭に植える木々のこと、季節の花々のこと、短歌について、書の道について、贈り物の箱に結ぶ見目美しい紐についてと話題は多岐にわたった。彼の話は含蓄に富み、どれも興味深かった。

「道を行じられてどのあたりまで進まれたとお感じですか」

私はふと問いかけた。

「まだまだでしょう」

袈弥は剃った頭をつるりとなでる。

「五分の一も進んでいないでしょうね。日暮れて道遠し。この頃よくそう感じます。死ぬまでにたどり着くことはむずかしいかもしれませんが、生まれ変わったらまた続きを歩くだけです」

私はその答えを聞いて、気の遠くなるような思いがした。これほど厳しく自己を鍛錬している袈弥でも、迷いから抜け出すことはできそうにないと言う。それほど険しい道なのだろう。安直に考えていた自分が間違っていた。夕暮れの本道を歩き続ける袈弥の後姿がふと脳裏をよぎる。袈弥の決心に頭の下がる思いだった。

「今日は、本当にありがとうございます。お話していただいたことを胸に刻みつけます」

私は床に両手をつき、深々と頭を下げた。

「礼にはおよびません。お安い御用です。千里の道も一歩からと言いますから、焦らずにじっくりお歩きなさい。初めからすべてがわかっている人なんぞ、誰もいないのです。人間の愚かさに気づいただけでもあなたは倅せなのですよ」

「ありがとうございます」

私はあらためて礼を言い、自分の苦しみを語ったことやぶしつけ

な質問を重ねたことを詫びて庵の間を辞した。

あてがわれた客間へ戻ろうとしてふと湯船の鮎が気になった。私は風呂場へ様子を見に行った。

湯はとうに冷め、風呂場の温もりは跡形もなく失せていた。夜気が肌にしみ、小さくしゃみをひとつした。湯船の上に提灯をかざすと、鮎はすっかり元気を取り戻したようである。方角を変えながら泳いでいる。なぜだか嬉しかった。

木桶で鮎をすくい、裏庭を抜けて低い崖をおりた。草が裾に触れ、かさこそと音を立てる。梟は森のどこかでまだ鳴き続けている。瀬音だけが静かだ。冴えた月がしんと川面に照り映えていた。

狭い河原に立った私は川べりに提灯と桶を脇に置き、しゃがみこんだ。

川面の映った自分の顔がかぶれたように腫れている。顔を近づけてよく見てみれば、例の毛虫だった。左頬の肉を食い破りながら蠢いている。

とうとう自分の顔にもあれが現れてしまった。だが、不思議と心は平静だった。いつものようにぞっと粟肌立つことはない。私にもあれが巢食っていることくらい、前から重々承知していたことだ。手で？を払った。毛虫はぱらぱらと石ころの上に落ち、すと姿を？き消した。

こうして向かい合うしかないのだろう。

そうこうしているうちに大切ななにかがはつきりわかるのだろう。醜い自分と向かい合う勇氣を得ただけでも、今日という日は意味があった。

「お前は自分の居るべきところへお帰り」

木桶を傾け、川の流れに浸した。鮎は途惑いもためらいも見せず、にさつと流れへ乗り出し、暗闇の川へ消える。

この暗い流れの行く先に苦しみのない世界が待っているのだろうか。

いつの日か私わたくしという地獄から抜け出すことができるのだろうか。

魔虫の蠢く？が川面に揺れる。

「仏の呼びかけ。まことの呼びかけ」

そっとつぶやいてみると、ほのかなぬくもりが胸にしみた。

了

覚悟（後書き）

最後までお付き合い合ってくださいまして、ありがとうございました。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9691p/>

生煮えの鮎

2011年8月1日03時21分発行